小山高専「英語Ｉ」における紙の英和辞書を用いた単語学習活動

杉山　桂子*

Vocabulary Learning Activities Using Paper English-Japanese Dictionaries in “English I” at Oyama Kosen

Keiko SUGIYAMA

With the widespread use of smartphones for a quick word search, coupled with declining English-Japanese dictionary usage in junior high school classes, less than forty percent of the new students are familiar with English-Japanese dictionaries. Moreover, in their Kosen life—where Wi-Fi is available and some classes often require the use of electronic devices—using a paper dictionary may seem outdated. Despite this new era and environment, the author has continued using paper dictionaries for vocabulary activities in “English I” to encourage students to learn English vocabulary more actively. This paper details the methods of the dictionary activities conducted in the last few years with explanations about their significance. Supplementary information reports on the dictionary usage experiences of first-year students in this academic year during their junior high school years, obtained through a questionnaire, as well as the significance of the English I dictionary activities from their perspectives.

KEYWORDS： word search, electronic devices, worksheet, active learning, paired activities

1. はじめに ―　単語学習活動の試行錯誤

筆者は小山高専に赴任してからの約 20 年間、1 年生科目「英語Ｉ」を担当している。この科目は高等学校学習指導要領が設ける外国語科目「英語Ｉ」（文科省(2003)）や「コミュニケーションＩ」（文科省(2018)）に準拠しているため、検定教科書を使用してきた。この教科書には通例 10 個の長文があり、そこに出てくる多数の新出表現(未習表現)をどう指導すべきかという難しさがある。本稿では、新出表現が文脈中で伝える意味を学習する活動を、便宜上「単語学習活動」と呼ぶことにする。この活動で取り上げる単語の中には、一見、形やスペルの上では既習済みに見えても、中学で習ったものとは別の品詞や意味のものも含む。

この科目を教え始めた頃、幾つかの単語学習活動を試したがうまくいかなった。例えば、オールイン

＊ 一般科(Dept. of General Education), Email: sugiyama@oyama-ct.ac.jp

グリッシュの授業を目指して新出表現を別の英語表現に言い換えたり、プリントに新出表現の用例とその訳文をタイプし、その訳文の一部を学生に記入させたりした。ただしこれらの方法では、教員から知識を一方的に伝達する時間が長かったためか、一部の学生の居眠りを誘った。このような試行錯誤を経て辿り着いたのは、紙の英和辞書とペア活動を利用する単語学習活動であった。

本稿の目的は、令和 6, 7 年度に英語 I で実施した単語学習活動、即ち辞書活動の詳細とその意義を説明することである。また、参考情報として、令和 7 年度の 1 年生に調査した「中学時代の英和辞典の使用経験」や「学生から見た辞書活動の意義」も紹介する。

2. 辞書活動の準備

2.1. 春休みの予習:「辞書引きワークブック」(三省堂(2018))

40 人規模のクラスで辞書活動をするためには、学生達に共通の教材―同じ紙の辞書―を用意させる必要がある。同じ辞書があれば、見るべき場所を確実に伝達することができるからである。また、数千円で購入できる紙の辞書の方が、数万円かかる電子辞書よりそろえる教材として現実的である。

この環境を整えるために、3 月初頭の入学説明会の日に、教科書と共に「ウィズダム英和辞典 第 4 版(紙版)」(三省堂(2019))を購入させる。この辞書には「英和辞典の引き方ワークブック(解答冊子付)」が特典として付随するが、これを辞書活動の予習として春休み中に取り組ませる。答え合わせもしてくるようにと指示する。

このワークブック(資料 1 参考)は紙の辞書を引いて答える練習問題を多数含み、これに取り組めば、辞書引きに必要な知識を多数学べる。31 ページからなる冊子で、丁寧に取り組めば 10〜16 時間かかるであろう。この課題を通じて少なくとも次の 6 点を学び取れば、授業での辞書活動に取り組みやすい。

① 見出し語はアルファベットの順番を頼りに見つけること。
② 複数の品詞が存在すること。品詞の表記の仕方。
③ 同じ綴りの単語でも、どの品詞として使われるかで意味が異なること。
④ 同じ単語の複数の語義(即ち、意味)には番号が付いていること。
⑤ 成句や句動詞の意味は、構成語のどれか 1 つの解説の中に見つけられること。

ただし、春休み明けに課題を提出しても、授業中、①の作業にも苦戦する学生はいる。従って、授業では丁寧な辞書引きガイダンスや、実際に辞書をひかせる活動が欠かせない。

1 見出し語を探す/発音・強勢を調べる

1-A 【見出し語】アルファベット表を参考にして，次の単語を辞書に出ている順番に並べましょう。
ヒント 1 文字目にまず注目し，それが同じなら 2 文字目・3 文字目に注目して探しましょう。

大文字 A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
小文字 a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z

(1) space, earth, America ＿＿＿ → ＿＿＿ → ＿＿＿
(2) tennis, soccer, music ＿＿＿ → ＿＿＿ → ＿＿＿
(3) rice, red, rabbit ＿＿＿ → ＿＿＿ → ＿＿＿
(4) interior, Internet, interested, international
＿＿＿ → ＿＿＿ → ＿＿＿ → ＿＿＿

資料 1　見出しの探し方　(三省堂(2019, p. 2))

2.2. 授業環境を整える

小山高専の学生達は授業中でもスマホや PC をネットに接続して使用するよう求められることが少なくない。このような環境で、「電子機器は使用せずに紙の辞書を使おう」と言っても、学生達がどの程度実行してくれるかは怪しい。円滑な授業活動を行うために、下記のような授業のルールを設定し、前期

と後期の始めに、このルールとその必要性を学生達に説明することが肝要である。

2.2.1　英語Ⅰ　授業中のルール:　スマホ，PC，タブレット等の電子機器の使用制限

英単語の意味検索は、辞書データにアクセスできるPC、タブレット、スマホでも可能であるが、英語Ⅰの授業では、辞書活動時のみならず、授業時間全体でこれらの機器をバッグまたはロッカーにしまうようにと指示する。これらの機器には、発音の確認がしやすい、授業の中で興味を持ったことについて素早く情報が入手できるという学習上のメリットがあるが、一旦使用を認めると授業とは無関係な活動(例: SNS、ネットゲーム、他の科目の課題等)に気をとられる学生が出がちである。またこの授業ではペア活動を頻繁にするが、授業活動に専心していない学生がパートナーとなることで、他の学生のやる気が削がれる可能性もある。このような理由から使用を制限するのだと説明する。

2.2.2　英語Ⅰ　単語活動中のルール　(電子辞書の使用制限)

英語Ⅰの授業では、電子辞書の持ち込みは認めている。電子辞書は英和辞書の他に和英辞書も含むという点で利便性が高いし、発音確認がしやすいというメリットもある。ただし、単語活動時は、電子辞書のふたを閉じて紙の辞書だけを使用するようにと指示する。そして、単語活動で紙の辞書を使う理由を、資料２のようなスライドを使って説明する。

①　多くの文字情報から欲しい情報を自分で素早く見つけ出す力を身に付けられる。 ②　一度に表示できる(一覧できる)情報がより多い。クラスメートと見比べやすい。 ③　電子辞書も適切に使えるようになる。

資料２　紙の辞書を使う理由

①について、自分の目を使った検索能力を身に付けることは、日常生活やTOEICの長文問題(例: 解答のヒントとなる箇所を長文から短時間で探す)でも必要だと補足する。

②に関しては、ペア活動の時に指差しによって自分の見ている場所を相手に素早く示したり、複数の意味番号を視線の移動だけで行き来することができるとも説明する。

③について、電子辞書は紙の辞書を基にして作成されており、紙版の情報構成や表記ルールを知っていると、電子辞書も効果的に使えるようになると言い添える。

3. 辞書活動の詳細

現在、英語Ⅰで利用している教科書「Heartening English Communication Ⅰ」(桐原(2022))は、平均580語からなる英語の長文を10個 (名称Lesson1～10)含み、各長文は４つのパートから構成される(名称Part1～4)。

辞書活動は、各パートの２番目の活動として実施する。その前に行うのは、「読む前の活動(pre-reading activity)」であり、写真や本文の音声を使い学生達の関心を本文の内容に向かわせる活動をする。

辞書活動の冒頭では、まず資料３(次ページ)のようなワークシートを配布する。このプリント上の(1)～(8)の８つの単語が辞書を引かせたい新出表現である。まずはこの単語の発音確認を、教員がこの単語を読み上げ学生にリピートさせることで行う。[注1)]

3.1　Exercise 1 下線引きと文脈確認

発音確認後、学生達にすぐに辞書は引かせない。石原(2024b, p.47)の言葉を一部用いると、単語の意味は「文脈の中で決まる」ので、辞書で単語の意味を知るためには文脈の確認が欠かせないためである。

まず、ワークシート(資料３)のExercise 1の指示文に沿い、(1)～(8)を教科書の該当ページの中に探

して下線を引かせる。タイマーを２分にセットし、この時間内に終えるように伝える。早めに下線を引き終わった学生には、下線の前後の単語(即ち文脈)を見ることで下線の単語の意味を推測してみるようにと指示する。

タイマーが鳴ったあと、スライド(資料４)を使い、(1)から順に下の３点を口頭で説明していく。

①新出表現は何行目にあるか
②その前後の表現はどのような意味か
③辞書を引く際のポイントは何か
(例:どの品詞を探すべきか、成句の場合はどの単語の成句欄を見るべきか)

例えば、(1)ignore であれば､「この表現は４、５行目にある。ignore の前後の意味(和訳)は、『一部の人々は依然として…な掲示を ignore します。』である。辞書で調べる際は、他動詞 ignore を引く必要がある。」と説明する。

(4)ならば、「この単語は８行目にあり、周辺の意味は『もし掲示や警告や punishment でさえ、...することができないのならば』である。名詞 punishment を引く必要がある」と説明する。

この下線引きと文脈の意味確認の狙いは下の３つである。

○　辞書引きの前に、文脈から新出表現の意味の推測をさせる。
○　文脈の中に知らない単語(例:(4)の still や sign)があっても､文脈の和訳を聞けばその意味がわかるので、新出表現に集中できること。
○　辞書で探すべき見出し語やその品詞を知らせて、辞書引き活動のハードルを下げること。(一斉授業なので、学生間の辞書引きにかかる時間の差は縮めたい。)

[L. 4 –Creative Problem Solving – Worksheet A]　　2025 英語Ⅰ(杉山)

1. Words and Phrases　<L.4 Part 1>

Exercise　1–下の(1)–(8)の英語表現を本文の中で見つけ下線を引こう。 さらに本文の中ではどのような使い方をしているのかを確認しよう。

(1) ignore = <他> _____

(2) psychological = <形> _____

(3) instead of A = <副, 成> _____

(4) punishment = <名> _____

(5) correct = <他> _____

(6) effective = <形> _____

(7) neighborhood = <名> _____

(8) reduce = <他> _____

Exercise 2 – 例にならい、紙の辞書を使って本文での使い方に最も近いと思う「意味」と、「(あれば)意味番号」と「(あれば) 用例」を書こう。

e.g.　with　= <前>　M9　…を使って,で　e.g. break a window with a hammer

資料３ ワークシート

[Exercise 1]　新出表現　行数

(1) some people still ignore ... signs　(L.4-5)
(2) ... is taking a psychological approach　(L.10)
(3) instead of telling people what to do　(L.11)
(4)If signs, warnings, and even punishment cannot ...　(L.8)
(5) ... cannot correct such bad behavior　(L.8-9)

資料４ 新出単語とその文脈

3.2　辞書活動初回 ： ２種類のガイダンス

Exercise 1 (下線引き、文脈確認)の次は、Exercise 2(資料３)の指示文に従い、辞書引きやシートの記入を行う。ただし初回では、その前に「辞書の引き方のコツ」と「ワークシートの記入方法」のガイ

ダンスをそれぞれ約 25 分と約 5 分かけて行う。この時点では、学生間の辞書引きのスキルに大きな差があったり、シートの記入方法にいくつか注意点があるためである。

3.2.1　辞書の引き方のコツ

下記の 4 つのコツをそれぞれ、資料 5 に示す「辞書引き問題」に取り組ませながら説明していく。

例題 1　<形>　surprised　(文脈:　I was surprised at the news.)
答え:　意味番号無し　[be surprised at [by] A] A に驚く

例題 2　<自>　see　(文脈:　I can't see clearly without my glasses.)
答え:　M1 目が見える

例題 3　<名>　order　(文脈:　The country needs peace and order.)
答え:　M4　秩序、治安

例題 4　<自>　work　(文脈:　"This approach" will work well.)
答え:　M5　<計画・手段などが>うまく働く、効果がある

例題 5　〈他〉　want A to do　(文脈:　I want you to speak louder.　)
答え:　M1b　[want A to do]　A に…して欲しい

資料 5 ガイダンスに使う辞書引き問題
(例題 1, 2 はコツ 1、例題 3～5 はそれぞれコツ 2～4 に対応)

○ **〈コツ 1〉　シートの(1)～(8)に記された「単語」や「品詞」と同じものを辞書で探すこと。**

まず、例題 1 の〈形〉　surprised を各自、辞書で引いてもらう。さらに、この単語が(スライドに示す)文脈中で表す意味を見つけたら手を挙げてもらう。

挙手した学生の数がクラスの約半数になったら、次にペアワークでどの見出しや意味を選んだか、指差し確認をしてもらう。その後に教員から「答え」を示す。解説では、「綴りが似ているからといって、<名>surprise や<他> surprise は選ばないこと。シートの情報をよく見て、ed を含む見出しを探そうね」と伝える。加えて<形>　surprised には意味が一つしかないので、意味番号がないことを教える。

次に例題 1 と同じ流れで、例題 2　<自>　see にも取り組ませる。解説では、「辞書の see の説明はまず<他>から始まるが、これは読み飛ばして<自>を探すべき」と述べる。同じ綴りの動詞でも、他動詞用法と自動詞用法で意味が異なることを確認させる。[注2)]

○ **〈コツ 2〉　意味番号があったら、教科書の文脈を参考に最も関連がありそうな番号を選ぶ。**

ここでは例題 3 〈名〉 order を引かせて、このコツを踏まえて意味番号を特定させる。解説では、次のようなアドバイスも伝える。「もし意味の説明が長ければ、各意味番号の直後の語義だけを見て意味番号を特定してみる。そうしても一つに決められなければ、今度は各意味の用例も見るなどして、見る範囲を広げていこう。時々、用例の中に教科書の文と似たようなものを見つけ、それが意味番号の特定につながることもあるよ」と述べる。

○ **〈コツ 3〉　調べる単語が仮に動詞で複数の意味を持つならば、文脈を見てその動詞の主語や目的語が「人」か「物」かを確認し、番号(意味)を探してみる。**

例題 4<自>work に取り組ませる。解説としては、文脈によると work の主語は "approach"(=手段)、すなわち「物」であるが、<自>work の M1～M3 の主語は「人」である　(例えば、M1 は『<<会社などに>>勤めている) 』なので主語は「人」)。M4 と M5 の主語は共に「物」であるが M5 の主語には<手段>

という言葉が含まれているため、M5 の方がより適切であると述べる。補足として、「形容詞の場合もそれが修飾する名詞の性質(即ち、人か物か)から意味番号を特定できることもある」と述べる。

○ 〈コツ 4〉 意味番号にアルファベットがつく場合(例: 1a, 1b)は、少なくとも番号は書く。
a, b の違いがわかればアルファベットも書く。

例題５〈他〉 want A to do に取り組ませる。解説では、M1a も M1b も want 自体の意味は「…を欲する」で同じ。ただし、この２つは want に後続する表現が異なる。文脈を考えれば、今回は M1a の[want to do] よりも、M1b の[want A to do]の方が関連性が高いと述べる。

以上のように、辞書引きのコツを説明する。説明の途中に辞書引き活動やペア活動を行うため、学生は集中して説明を聞くことができる。

3.2.2 ワークシートの記入方法

資料 6 のスライドを使い、意味番号、意味、用例の書き方を説明していく。それぞれ、下の補足も口頭でする。

○「意味番号」について、『説明を読んでも１つに決められない』という場合、間違ってもいいので何か１つ書き出すこと。実際、辞書使い様々な英文を読む際には、「どちらの意味(番号)と考えても話は読み進められる」というケースがよくある。ただし、この授業では、見出し近くの意味番号だけでなく複数の意味番号を見る習慣を身につけるために意味番号の特定をしてもらう。

○「意味」について、用紙のスペースが限られているので、辞書の記述が長ければ、抜粋したり、自分なりに省略して書いてよい。

・「意味番号」:
　番号無し(意味が一つだけ) → 「M無」など書く
　番号が複数有る(多義語)
　　→文脈等を考え１つ選ぶ。「M3」など書く。
・「意味」: スペースの制限上、省略して書いてよい。
・「用例」:
　選んだ意味番号に用例が記載
　　→一つ選び、それを「丸ごと」書く。
　用例の記載無し→「e.g.無」など書く。
※ Q1から番号順に取り組もう。後でペア活動有り。

資料 6 ワークシートの記入方法

○「用例」について、省略しない方が語彙力が増えるし、その単語の使い方を深く学ぶことができる。

3.3 Exercise 2 辞書引き、記入作業、ペアで見比べ

２つのガイダンスを終えたあと、資料３(前々ページ)の Exercise 2 の指示文に従い、学生達は自分の辞書で単語を引き、「意味と意味番号と用例」を下線部に書き写す。まずは、(1)～(3)を７分で行うようにと指示し、黒板のタイマーも７分にセットする。

学生の能力(辞書を引く速さ、辞書の説明を読み取る速さ、字を書く速さ)によって、所要時間が様々である。７分経つ前に(1)～(3)が終わった学生には、(4)以降も取り組ませる。[注3] この個人活動の間、教員は質問対応をしたり、意味番号や用例の書き忘れている学生がいれば指導する。

７分後、作業が途中でも、学生達に隣の学生とペアを組んで (1)～(3)に関して自分が記入した情報を相手と見比べるように指示する。意味番号については、同じ番号を選んでいるか、自分がなぜその意味番号を選んだのかを共有させる。また、パートナーの意見を聞いて「自分の選んだ意味番号が違う」と思ったとしても書いたものは消さないようにと指示する。

3.4 Exercise 2 クラス全体での確認

１分のペアワークが終わった後、(1)から(3)の記入例を、資料７(次ページ)のようなスライドを用いて示していく。この際、一部の問題については、学生をあてて書いた情報を発表させる。時には、クラス全員に自分が選んだ意味番号を、選択肢を設けて挙手で表明させたりもする。教員が記入例を示す時には、その番号を選んだ理由や、語法に関する補足説明(資料７の※マーク参考)をしたりもする。

資料７の(2) psychological のように、「文脈的には M2 でも M1 でもどちらでも良い」と思えるような

ケースがあれば、スライドには複数の意味番号を記し、学生達に「文脈上どちらの意味ともとれる(どちらでも良し)。」と伝える。なお、(2)の M1 は「心理的な」であり、M2 の学術的な意味―「心理学的の」―よりも、幅広い意味である。

このいわゆる「解答例」を見せる際に強調すべきは、『意味番号など、自分の書いたものがスライドと違っても消す必要はない。プリントの余白に少なくとも意味と意味番号をメモすればよい。他の意味も知っていれば役に立つ時が来るから』と伝えることである。

(3)までの全体確認が終わったあとは、授業時間の残りが十分にあれば、(4)～(6)も「個人での辞書引き」、「ペアでの見比べ」、「全体での確認作業」を行う。ただし、この段階では辞書引きの時間を、1,2 分減らしてもよい。一部の学生は既に一部または全部終えているからである。もし授業時間が残っていなければ(4)～(6)は宿題とする。なお、(7)と(8)は基本的に毎回、宿題とする。[注4)]

辞書活動の後には英文読解活動が続く。多くの学生達が読解活動で躓かないようにするために、(6)までは事前に意味確認を済ませておくことが望ましい。

この章では辞書活動の流れを説明してきた。各活動の所要時間も含めて表 1 にまとめる。

[Exercise 2]
(1) M1 <人,物,事>を無視する
e.g. **ignore** A's advice
(2) M2 心理学の(的な)<研究・分析など> **or M1**
e.g. conduct **psychological** tests (M2)
(3) (M無) Aの代わりに
e.g. **Instead of** buying a briefcase, I bought a backpack.
※ Aに動詞を入れたいならdoing形(動名詞)にする。
(4) M1 [U] 罰すること (Uncountable=不可算)
e.g. severe **punishment** for drunk driving

資料７ 意味番号等の解答例

表１ 辞書活動の流れ

	活動内容	時間	詳細
1	発音確認	1 分	Q(1)～(8)の単語発音をリピートさせることで確認。
2	下線引き	2 分	Q(1)～(8)を本文の中に見つけて下線を引く。時間が余れば下線の前後の表現(文脈)から意味を推測する。
3	下線の場所、前後の文脈、品詞の確認	3 分	スライドで下線の場所、文脈の意味などを確認する。
4	ガイダンス (初回のみ)	(30 分)	「辞書の引き方のコツ」と「ワークシートの記入方法」を説明する。
5	辞書引きと辞書情報の書き出し(個別活動)	7 分	Q(1)～(3)の単語を引き、ワークシートに「文脈上関連のある意味番号、意味、辞書の用例」を書き込む。
6	ペアワーク	1 分	パートナーと書き出した情報について意見交換する。
7	全体確認	3 分	教員が学生を当てたりスライドを見せながら、「意味番号、意味、辞書の用例」の記入例を示す。
8	Q(4)～(6)	9 分	基本的には上記の 5～7 の活動を実施する。(5 の時間は縮めてもよい (7→5 分など)。)
9	Q(7)と(8)	4 分	基本的に宿題にして次の授業で 6,7 の確認作業を行う。
	所要時間	(4 は含めず) 30 分	

3.5. 補足: 辞書引き小テスト

この節では辞書引き能力を試す小テストを紹介する。この小テストは新学期、何回か辞書引き活動を行った後に実施するが、実施予告は春休みからしておく。

この小テストは 10 問、10 点満点であり、問題の半分(a 問題)は「辞書引きワーク」とほぼ同じ問題で、もう半分(b 問題)は筆者がこのワークブックの問題に関連付けて作成したものである。学生達には「ウィズダム英和辞典 第 4 版(紙版)」を使って答えるように求める。下に例題と答えを示す。

下線が引かれた英文に関して a と b の質問に答えよ。(2 分)
a. 英文が[　　]の意味となるよう、①〜③より最も適切な語を選びなさい。
b. 「keep 〈自〉」 を調べてその意味番号の中から、この英文の kept を説明しているものを、数字で答えよ。
英文: I tried to stop him, but he kept { ① from ② in ③ on } swimming.
[僕は彼を止めようとしたが、彼は泳ぎ続けた]
(答 ③, M2)

資料 8 辞書引き小テスト

4. 辞書活動の意義

3 章で説明した辞書活動について、筆者が考える意義は下記の 4 つである。

①「新出単語(多義語)について、文脈上最も関連がある意味番号を選ぼう」など、わかりやすいタスクを与えることで、学生は答えを求めて能動的に辞書を引き、意味を学習することができる。実際、単語活動としてこの方法を取って以来、活動中に居眠りをする学生は減った。

② 辞書を引く前に文脈を確認することにより、学生間に語彙力の差があっても、他のクラスメートと同じ土俵に立ってこの意味探しに取り組んだり、意見交換ができる。ペアワークは教員とは異なる視点での説明を聞けるという点で効果的である。

③ 学生は各自、時間が余ればより多くの用例や他の意味番号を読むことが可能である。学生間の英語力の差が大きくても、各自、英語力を高めることが可能である。

④ 学生に英和辞典の使い方を確実に習得させることができる。石原(2024a)の言葉を言い換えると、英和辞典の引き方は学生が自ずと身に付けることは難しく、教員が自分の学生にあったオリジナルの教材を作成し、辞書を引いた際に見るべき項目を、授業活動を通して教えることが肝要である。学生達に長文をより正確に読んだり、単語をより正確に使うためのスキルを身に付けさせることができる。

5. 参考: R7 年度高専 1 年生に行なったアンケート

5.1. 中学校での辞書活動の経験

筆者が辞書活動を始めた約 10 年前には既に、入学生の中に「中学時代に英和辞典を使ったことがほとんどいない」と言う学生がいた。 山田(2025)も中学や高校での英和(和英)辞書離れを指摘している。本稿の執筆をきっかけに、R7 年度高専 1 年生(在籍数 203)に forms を用いてアンケートを実施し、中学時代の辞書活動の経験を調査した。181 人から得た回答を表 2(次ページ)に示す。

なお、アンケートの中には「英和辞典」の定義として次のような説明文を含めた。「英和辞典とは、ウィズダム、ジュニアアンカー、ジーニアスなどの学習者向けに編纂されたもの、有料のものを指す(その

電子版でも OK) 。よって Weblio などのオンラインの英和辞典(複数の既存の英和辞典や対訳データを集約したもの。編纂されたものではない)は対象としません。」また表中の割合の数値は少数点第一位を四捨五入したものである。

表 2　中学時代の英和辞典の使用経験

質　　問		答の選択肢と該当する学生の割合(181人中)			
Q1	中学校の英語の授業で、「英和辞典」の使い方の説明を受けたことはあるか?	ある	40%	ない	60%
Q2	中学校の英語の授業中に、特定の単語に関して、『(辞書を持っている人は)その場で「英和辞典」を引いてみて』と指示されたことはあるか?	ある	23%	ない	77%
Q3	中学時代に「英和辞典」を使って英語学習をしていたか? 学内でも学外でもOK。	使用していた(時々の使用も含む)	34%	使用していなかった（あまり、ほとんどしていなかったも含む）	66%

このアンケート結果から、高専１年生の６割以上が中学時代の英語学習に英和辞典をほとんど活用していなかったことや、その７割以上が授業を通じて実際に英和辞典を引く機会が無かったことがわかる。

アンケートの中には、回答任意の備考欄を設けた。一部の回答を資料９に示す。この内容から、中学校または教員による単語活動の多様性がうかがえる。

現行の中学校学習指導要領（文科省(2017)）を読むと、この単語活動の多様性には納得がいく。その記述の中には、「辞書の使い方に慣れ、活用できるようにすること」（文科省(2017, p.152)という文言もあれば、「生徒が身に付けるべき資質・能力や生徒の実態，教材の内容などに応じて，視聴覚教材やコンピュータ，情報通信ネットワーク，教育機器などを有効活用し，生徒の興味・関心をより高め，指導の効率化や言語活動の更なる充実を図るようにすること」（文科省(2017, p.152)）もある。また、多くの中学校教科書の巻末には確かに「辞書のようなもの」―教科書の単語と熟語がアルファベット順で文脈中で伝える意味やページ数と共に記載されたもの―があり、これがあれば英和辞書を引く必要性が薄れる。単語学習の時間を短縮すれば、学習指導要領に記述される他の活動(例:「話すこと[発表]」に関する活動)により多くの時間を割くことができるだろう。限られた授業時数の中で何に重きをおくかで単語活動の方法が変わるのだと思う。

・英和和英辞典を持ってくるように言われていた。
・学校に英和辞典が多数あり、授業で使う時はこの辞書が貸し出された。
・タブレットが１人ずつに配布され基本的にはタブレットで翻訳などしていた。
・中学校では教科書の後ろに掲載されていた新出表現とその意味のリスト(英和辞書のようなもの)をクラス全体で使っていた。

資料９ 中学校での単語活動の違い

5.2. 英語Ｉの辞書活動の意義　―　学生達の視点から

この度実施したアンケートでは、「英語Ｉの辞書活動を通じ『英和辞典』の使い方に関して学べてよかった(参考になった)と思うことがあれば書いてください。」という項目も含めた。76 の回答のうちの一部を、紙面の都合上、表現を短くして以下に示す。

・辞書を引くスピードが上がって気軽に英和辞典を使いやすくなった
・スマホで調べると調べたい英語の内容だけが出てくるけど、辞書で調べると同じ動詞でも意味が異なるといった応用的なこともわかること
・１つの意味だけではなく色々な意味や例文が載っており、単語に対する理解を深められた
・１つの単語の複数の意味から、当てはまる意味を探すのができるようになったこと

・どの意味が自分の調べたい内容に合っているのか迷うことがあったが、例文を読むことで場面に合った意味を見つけやすくなった
・スマホだと違う意味が出てしまうことがあるから意味の一覧を見れるのがよかった
・単語を調べる事で今までよりも単語を覚えやすくなった
・紙の英和辞典で発音も調べることができると知ったこと
・定期的に活用することで辞書への苦手意識がなくなり、ネットで調べるという方法の他に辞書で調べるという選択肢が自分の中にでてくるようになった

6. 最後に

本稿では、2024 年度と 2025 年度の英語Ⅰで実践してきた単語活動の詳細を説明した。この活動は、学生達が同一の紙の辞書を使い、ワークシートに記す８つの新出表現について文脈を確認しながら辞書の中から関連する意味(番号)を選び、それを辞書の用例を添えてシートに書き出す活動である。この辞書活動の意義は、学生達が与えられたタスクをこなそうと能動的に単語学習できることと、英語力の差があってもクラスメートと意見を交わしながらペア活動ができること。また、それぞれが辞書を活かして英語力を自分なりに高められることである。また、参考情報として今年度の１年生に実施したアンケートの結果、例えば「40%未満の学生しか中学時代に英和辞書をほとんど使っていなかった」などを報告した。本稿の執筆を通し、紙の英和辞書を使った単語活動はネットや電子機器が普及しつつある今の時代だからこそ、実施する意義が大きいと実感した。

参考文献

1) 井上永幸・赤野一郎：ウィズダム英和辞典第４版，三省堂(2019)
2) 石原健志：辞書の使い方を学ぶ教材を作ってみよう，英語教育９月号，Vol 73, No. 8, p.47 (2024a)
3) 石原健志：４技能のための辞書指導―長文読解編，英語教育 10 月号，Vol 73, No.9, p.47 (2024b)
4) 文部科学省：高等学校学習指導要領(平成 15 年 12 月改正), (2003), 〈https://erid.nier.go.jp/files/COFS/h15h/index.htm, 2025 年９月 30 日検索〉
5) 文部科学省：中学校学習指導要(平成 29 年告示)，(2017), 〈https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_02.pdf, 2025 年９月 30 日検索〉
6) 文部科学省：高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)，(2018)，〈https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_03.pdf, 2025 年９月 30 日検索〉
7) 小山敏子：紙辞書と電子辞書の効果的な使い分け，英語教育５月号，Vol74, No.2, p.26 (2025)
8) 吉村由佳　ウィズダム英和編集委員【編】：英和辞典の引き方ワークブック，三省堂 (2018)
9) 望月正道他：Heartening English Communication Ⅰ，桐原書店(2022)

注記

注１) 新出表現の発音は、各パートの最後に行う音読活動でも確認する。また、年度途中には発音記号の説明と演習を実施し、この後からは紙の辞書でも発音の確認が可能になる。
注２) 英和辞典は、英英辞典とは異なり、自動詞と他動詞で意味の記述が分かれている。よって、自動詞と他動詞の違いに関するガイダンスも必要であるが、この初めの段階では実施せずに何度か辞書活動を実施した後で行う。紙面の関係上、自・他動詞のガイダンスの詳細は割愛する。
注３) 制限時間内に(8)まで終わる学生が出てくれば、英語Ⅰに関する自習(例　教科書のワークブック)に取り組んでもよいと伝える。
注４) 紙の辞書の保管場所については、授業に忘れないように基本的に学内(自分のロッカーなど)に保管するよう指示している。そして「自宅で単語調べの課題をする時には、購入者が登録すれば無料で利用可能な WEB 版の辞書検索サービス―Dual Wisdom―を使用してもよい」と学生に伝えておく。

［受理年月日 2025年9月30日］